

水稲経営の規模拡大に向けた飼料用米の高位安定生産

－飼料用米「夢あおば」の安定多収化のための主要ポイント－

1 活動のねらい

市原市の水稲大規模経営において、農業所得確保と経営規模拡大には、助成金メリット上限額が得られる 10a 当たり実収 660kg 以上の収量を確保できる栽培ポイントを明確にすることが重要です。作付面積を拡大すると移植期間が長くなり、移植適期を逃して収量が低下する傾向がみられます。そこで、多収が期待される「夢あおば」の実証展示ほを設置し、安定多収技術の実証と主要ポイントを整理し、普及を図りました。

2 活動の背景

国では、食用米の過剰生産による米価下落の対応策として飼料用米生産を推進しています。これにより市原市では、飼料用米栽培に取り組む生産者が増え、平成 27 年からは専用品種の「夢あおば」を主体に面積が拡大しています。しかし、移植時期・栽植密度・肥培管理技術の課題や倒伏により、政策メリットを享受できる 10a 当たり実収 660kg は高い壁でした。そこで、毎年実証展示ほを設置し、農林総合研究センター温暖化研究室と連携し、追肥のタイミング等を主とする収量拡大のための要因を解明することとしました。

3 普及活動の経過・結果

(1) 疎植栽培による安定多収栽培の実証結果

平成 30 年度の実証展示ほから得られた収量調査結果を、表 1 に示しました。㎡当たり籾数は、33,900 粒で目標より少なかったものの、不稔歩合は 9%と低く登熟は良好で、千粒重も 24.2g と高く、結果的に 10a 当たり収量は、実収で 678kg を確保しました。平成 27 年度から実証展示ほを設置し、実収 660kg 越えを目指したことで、年々収量水準が上がり、4 年目にして初めて最高額の所得メリットを得られる収量水準を到達しました。

表 1 「夢あおば」の実証展示ほにおける収量構成要素等の結果

区分	穂数	一穂 籾数	㎡当たり 籾数	千粒重 (1.7 mm 以上)	不稔 歩合	収量 (実収)
	本/㎡	粒	粒	g	%	kg/10a
平成 30 年	299	113	33,900	24.2	9.0	678
(参) 29 年	311	112	34,800	23.2	10.5	647

注) 坪当たり株数：疎植栽培 (42 株)

移植日：平成 30 年 5 月 11 日、(参)平成 29 年 5 月 12 日

成熟期：平成 30 年 9 月 8 日、(参)平成 29 年 9 月 7 日

(2)「夢あおば」の安定多収栽培技術の主要ポイントと普及

実証展示ほにおいて、平成27年から蓄積してきた飼料用米栽培の生育データ及び収量調査結果等の分析から「夢あおば」の安定多収化のための主要ポイントを下記のとおり整理しました。

- ①成熟期迄の長期的な地力保持のため、冬期に良質な鶏糞等堆肥を施用する。
- ②移植時期は、5月10日～15日を適期とし、一株当たり5本を確保する。
- ③栽植密度は、坪当たり42～45株の疎植栽培が生育制御しやすく、省力化できる。
- ④目標穂数は、10a当たり300～310本になるよう調整する。
- ⑤施肥量（施肥時期）は、基肥10a当たり7～8kg（移植同時施肥）、追肥は、同2～3kg（幼穂形成期頃）とする。
- ⑥水管理は、幼穂形成期の茎数が440本以上としない中干し等を行う。

以上の生育管理により、㎡当たり粒数約3.5万粒、千粒重24g以上が得られ、10a当たり収量660kg以上の安定多収化が可能となり、飼料用米を取り入れた安定的な水稻大規模経営が実現します。

生産者への普及に向けて、7月に現地検討会を開催し、生産者からの意見も聞きながら情報提供を行いました。市原市農業振興協会水稻部会には集団指導及び巡回指導により、主要ポイントの周知と普及に努めました。



疎植栽培での省力的な移植作業(5月)



現地検討会で茎数等の生育確認(7月)

4 今後の課題

水稻大規模経営における所得確保と経営規模拡大に向け、省力・低コストが可能な「夢あおば」を経営の中にどう位置づけ、どの程度導入するかの試算が必要です。また、地域内の畜産農家の需要に見合った生産量を確保していくため、一層の飼料用米の作付拡大を図ることが求められています。

5 担当者 市原グループ

6 協力機関 農林総合研究センター、市原市、JA市原市、 けいよう農業共済組合